



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学 機関リポジトリ

あんげろす第79号

著者	司馬 純詩, 長谷川 美保, 土肥 歩, 篠崎 美生子
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
巻	79
発行年	2019-07-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/00003680

あんげろす

日露戦争のちょうちん行列

司馬純詩

ある日曜日の集会で聞かれました。

「アメリカの銃規制はなぜ進まないのでしょうか。」

「国家に対する人々の考え方が、そもそも異なるからです。」

宗教弾圧や、王権支配から逃れて新世界を築いたアメリカ市民は、憲法で「武器を保持・所有する個人の権利」を保証（修正2条）しています。刀狩令で武装を召し上げられた日本人の従順な「国民」精神と全く異なるのです。武器は、人民が権力に対抗できる最後の手段。大統領の暗殺さえ可能。そういう権利をアメリカ人民は容易に手放さない。

刀狩令以降300年ほど、幕末維新の公家と帯刀階級は人口5割（ヘボンの観測）にも上り、残り半分の農民等に寄生していました。文明開化でやがて消滅するも、人民に武装の自由はありません。「和」を尊ぶ社会に、人々が丸腰で寄り添った形です。帝国主義政策は、これを逆手にとり、「天皇の赤子」として国民を決死の戦争に狩り出しました。

5月から浩宮徳仁が天皇となり、元号が令和に代わりました。国内は熱狂のうちに退位・交代、改元が進み、上皇明仁の巡幸報道が「親しみ」で満ち溢れた。

（次頁へ続く）

第79号

2019年7月



我が家では次のような会話が交わされた。——今般の天皇交代劇と、かつての「金正日→金正恩」の世襲継承とは、どちらの方があざやかだっただろうか。

連れ合いの意見は、「金→金」移譲の方が「そりゃあ、あざやかだったわよ」であった。

金王朝は、強固な権力構造に固められた体制である。叔父の処刑や異母兄の暗殺といった、恐怖による支配が貫徹している。メディアは完全統制、放送に選局の自由はなく、おおかたの国民はこれを不思議とは思わない。幼いころから、親代々限られた局しか聴けないのだから、そういうものだと思っている。

一方、日本は投票に行くも自由、だれに投票するかも自由。「首領は神様」の国に比べれば、それなりの民主国家である。「もう天皇はいらない」とか、「西暦があればいい」という意見が出てもいい筈。それがどうであったろうか。明仁が繰り返す地方訪問が、呪術的「感激」に迎えられ、新元号発表を國中こぞって待ち受け、「令和」と聞けば時代の「夜明け」かのごとく、渋谷スクランブル交差点や新宿アルタ前を埋め尽くして、若い人たちが狂乱した。

「戦争なんて起こらないさ」、「天皇って、象徴だもんね」。辛酸を舐め尽くした戦争から70年余りも経つと、世はもう孫の代。「國中こぞって」、まさに「ちょうちん行列」。これが国民精神総動員の体制基盤であることなどにまったく思い至らない。ましてや、選択権のない形の天皇制や、議論のない皇位継承・交代、改元が、民主主義における人民の決定権の放棄にはつながってこない。それでもいまだ明治神宮は天皇が神様、靖国神社は天皇の赤子、英霊が神様なのである。その上で、国を挙げてやんごとなき「皇室」階級を奉り、国民自らを下々に潜り込ませる。同質集団主義のこの国で、「こぞって世襲寄生階級を奉つる」暗い雲が、重たく私たちを蔽っている。

「日本の皇位交代と改元の方が、あざやかどころか、優雅でさえあったじゃないか。」

反論異論を葬った皇室の手腕は「おみごとっ！」だったと言わざるを得ない。

金王朝は、白色テロの蒋介石政権と同質である。銃規制の徹底した社会は、銃で統制される恐怖の体制と紙一重である。象徴に「国民の総意」の制度的みそぎがなければ、神与の権威と同じである。万全な民主主義もないが、選択権のない民主主義は、あり得ない。

そんなことをまくし立てたらわが連れ合い、「そうね、あなただけがまくし立ててもしょうがないけどね」というのだった。たしかに。

キリスト教会は、何をしているのだろう。

しば・じゅんじ（名誉所員）



2019年5月1日開催 天皇の代替わりを考える講演会の様子

リードオルガン

長谷川 美保

記念館の2階にある古い大きなリードオルガンを、皆さんはご存知だろうか？

港区の文化財に指定され、大会議室で、学院創立者達の荘厳な肖像画に囲まれて鎮座しているが、実はあまり調子が良くない。百年を超えているから老朽化して当然なのかもしれないが、聞けば、このオルガンのふるさと米国では、このように古いリードオルガンを修理しながら自宅で大事に使う人も多い、という。

明治学院のリードオルガン（米国メイソン&ハムリン社

製、2 段手鍵盤・足鍵盤・15 ストップ) は、現在のパレットゾーンが建てられる前の校舎に捨て置かれ、ただの机だと思われて廃棄される寸前、偶然ふたを開けて見て「鍵盤がある！これは楽器ではないか？」と救われた数奇な運命を持つ。それから修復が出来る職人を探したが、国内にプロのリードオルガン職人は片手ほどしかおらず、修復の予算もつかず、人づてに、アマチュアで、ボランティアで修復を請け負ってくれる奇人な方に出会った。彼は中学の音楽教諭を定年退職し「時間だけはあるから、構造を研究しながらゆっくり修復する。」と、毎日弁当を持参して、あてがわれた古い教室で埃だらけになってリードオルガンを分解し構造を調べる日々を重ねていた。仕事の合間を縫って時折“工房”を訪ねると、「このリードは素晴らしい造りですねえ、ここところが……」「100 年前は手ふいごで送風していたんですが改造されていてここがよくわからなくて」などと、独り言の延長のように現状報告をしてくれた。3 年後、このリードオルガンは再び歌うようになった。が、経年劣化が甚だしく、息も絶え絶えの音が続出しはじめ、ここ数年「要治療」で名医を待つ患者のような状態であった。

100 年前、このリードオルガンはどんな音楽を奏でていたのだろうか？

大学図書館の貴重資料を探り、100 年前の理事会記録（美しい筆記体の英語で記されている）や「明治学院百年史」などから、およそ以下のことが判明した。

1914 年 11 月 2 日、理事会で A.K. ライシャワー氏が以下のように報告。

「米国シカゴ、ハイパーク教会ドクター、チャンブラン氏より、好意にて壮大なるオルガンを寄贈。学院より英語と邦語の感謝状を送る。」

1914 年 11 月 24 日、常務理事会での報告。

「サンダム館火災時、新オルガンを運び出した生徒に謝辞を述べる。」

なんとこのリードオルガンは、明治学院に来て間もなく火災に遭い、引き摺り下ろされて再び命拾いしたのだ。それにしても重厚な作りの 300kg 近くある楽器を数人の生徒で運び出すとは、まさに火事場の馬鹿力。その後リードオルガンは、チャペルで礼拝の賛美の歌声を支え続け、また、教職員だけではなく学生達も演奏をし、またはレバーを押して送風する“ふいご係”を務め、学内で親しまれていたようである。ハナフォード、安部正義らの教員諸氏、木岡英三郎、鳥居忠五郎ら、後の讚美歌作者でありオルガン音楽を日本に広めた功績を持つ学生諸氏がこの楽器を奏で、そして哲学者・森有正の日記にも「明治学院のオルガンを弾いた」とある。

このリードオルガンは、今ふたたび職人の手に委ねられて、大がかりな修復が施されようとしている。自治体の助成を受け、100 年前と同じ部品が世界中から取り寄せられ、現在修復の“工房”となっている記念館 2 階で分解され、研究調査と修復作業が行われる。修復に携わるのは、パイプオルガン・リードオルガンの歴史的楽器の修復に造詣の深い、オルガンビルダーの横田宗隆氏。長く米国、スウェーデンをはじめ世界各国で歴史的オルガンに関わっているエキスパートである。横田氏によれば、先のアマチュアの方による修復作業には、大変丁寧で、楽器の本質を損なわない優れた作業の跡が見られる。このリードオルガンのような“歴史の生き証人”を題材にした研究調査に、プロもアマも一緒に多彩なアプローチを試みる、このような行為こそ、大学がなすべき“知の探求”であろう。

今日はどのような発見があったか、“工房”を訪ねる楽しみがしばらく続く。

はせがわ・みほ（明治学院音楽主任・オルガニスト）



宣教師マクニールと壬寅奇災

土肥 歩

数年来、私はニュージーランド長老会が組織した広州鄉村伝道団（以下、CVM）の文書や、宣教師ジョージ・マクニールの個人文書を用いて、キリスト教伝道と地域社会の関係について初歩的な研究を進めてきた。その成果は論文や単著となっているが、資料を読む中でどうしても気になっていることがあった。それは、1903年5月から7月にかけて、彼が広西省（現在の広西チワン族自治区）で飢饉救済を行った、という事実であった。

1901年秋から1903年夏にかけての広西省では、洪水と干ばつによって飢饉が発生していた。いわゆる「壬寅奇災」である。ただし、CVMの伝道地域から離れた広西省でわずか2ヶ月ほど活動したという性格ゆえ、既存のCVMを扱った研究ではほとんど顧みられることがなかった。私自身、CVMが行う私信や金銭の送付活動に関心を向けていたため、マクニールの広西省での活動を取り上げることはできなかった。

しかし、それから数年後、私は別の資料からある事実に気づかされた。それは、在広州アメリカ総領事マクウェイドが広西省の飢饉のために本国で募金活動と呼びかけた結果、広東省のプロテスタント宣教師を動員した「アメリカ救済遠征隊」が組織された、ということである（なお、最初期の救済活動は広西で活動していたアメリカ宣道会によって担われていた）。実は、マクニールはこの遠征隊の一員として広西省へ向かったのである。

ただし、私はこの救済活動の性質を理解するために欠かせないのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて広西省・雲南省・貴州省とフランス領インドシナ連邦（以下、仏印と表記）の境界付近で発生した騒乱だと考えている。この騒乱では、窮乏した除隊兵士（中国語では游勇）や反清朝をスローガンとする秘密結社（会党）が民衆を率いて、各地で略奪を行ったり行政機関を襲撃したりしたのである（騒乱の経緯は徐舸『清末広西天地会風雲録』（広西師範

大学出版社、1990年）に詳しい）。そして、それに拍車をかけていたのが壬寅奇災であった。実際、游勇や会党の武装蜂起に被災民が加わったという記録があり、行政官もまた災害が騒乱に与える影響を憂慮していた（徐舸、前掲書。庾裕良ほか編『広西会党資料彙編』広西人民出版社、1989年）。これに加えて、沿海部の民衆の間には、広西省の地方官がこの騒乱を鎮圧するために、仏印に軍隊派遣を要請しているのではないかと根拠のない噂が流れたほどである（肖宗志「拒法運動原因的真相与王之春被劾之由考論」『南華大学学报』、2011年10月）。

沿海部の中国民衆と同じように、マクニールもまた広西省の状況に関心を払っていた。彼が本国に送った手紙によれば、広西省における政情不安は多くの関心を集めており、中国人もヨーロッパ人も大規模な暴動を恐れている、という。「そして今、そこで最も悲惨な飢饉が発生している」ため、宣教師たちが救済物資を配布している、と続ける。ただし、広西省の宣教師たちは反乱者を目撃していないし、反乱に関する報告は中国への出兵の口実をさがしているフランス人の仕業だと判断している（“Letter of Rev. G. H. McNeur to the Convener,” *The Outlook*, June 27, 1903）。ただ、彼の文章は災害と騒乱の因果関係について明言を避けている印象を受ける。これが彼の認識不足によるものか、それとも本国の支援者や伝道委員会に配慮したためなのか、慎重な史料批判が必要となるだろう。

この後、マクニールは5月17日から7月5日にかけて広西省東部で飢饉救済に従事した。騒乱が続く広西省においてプロテスタント宣教師による飢饉救済はどのように推移したのか、そして、被災した地域社会はどのようにキリスト教伝道を認識したのか、今後さらに分析を進めていきたい。



どい・あゆむ（協力研究員）

←1900年当時のマクニール（左）
（典拠：Henry H. Barton, *George Hunter McNeur*, Christchurch: Presbyterian Bookroom, 1955）。

篠崎 美生子

『^{セイント}聖☆おにいさん』(中村光)なるマンガを愛読している。「目覚めた人ブッダ、神の子・イエス。世紀末を無事に越えた二人は、東京・立川でアパートをシェアし、下界でバカンスを過ごしていた。」(講談社モーニング KC 第1巻カバー)という設定に、敬虔なクリスチャンは眉を顰められるかもしれない。むろん、それが神学的にいかにも矛盾した設定か、いかな不良クリスチャンの私にもわかるのだが、その矛盾を忘れるほどに、ふたりのキャラクターは魅力的なのだ。

イエスとブッダは、互いの文化やそれぞれの弟子を尊重し、かつまた、現代日本の文化と軽い衝突を繰り返しながらも、次第に「下界」になじんでいく。基本的にはコメディなのだが、たとえばその中に、ブッダがイエスのために魚×2、パン×5の柄のあるTシャツを手作りする場面があったり、イエスがユダの2000年間の罪悪感を和らげようと必死に気遣ったりする場面がちりばめられており、そうした底抜けの善意に私はほっとする。

大げさかもしれないが、私には、『聖☆おにいさん』に他者との共生へのヒントがたくさん隠されているような気がしてならない。それにこのマンガを読むと、立川だけでなく、自分の身近ないたるところに、イエスが善意の塊として存在しているかのような安心感が得られる。そしてその無数のイエスに背中を押してもらいながら、小さな勇気を奮い起こして日々生きているように感じられてくる。

今年度より、主任を仰せつかりました。上にも申し上げたように単なる不良クリスチャンで、キリスト教についての学も教養も乏しいのはありますが、徐正敏所長をはじめ、ベテランの所員、研究員の皆様、教学補佐の高橋英里さんに支えられて、なんとかか経過しております。明学を離れられた大西晴樹先生も、名誉所員に加わっていただきました。

この1年、どうか皆様、私の背中を押してくださいませ。

しのぎき・みおこ (主任)



『^{セイント}聖☆おにいさん』第4巻 (講談社モーニング KC 2009)

研究所活動 (2019年4月～2019年6月)

「近代デンマークの精神を学ぶ

—N.F.S.グルントヴィ、フォルケホイスコーレ、福祉社会」

開催日時：2019年4月13日(土) 14:00-16:30

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館2階 1201教室

講演者：Edward Broadbridge

Hanna Broadbridge

特定質問者：小池直人 (名古屋大学)

コーディネーター：坂口緑 (本研究所所員・社会学部教授)

主催：明治学院大学社会学部坂口緑研究室

共催：キリスト教研究所

「天皇の代替わりを考える講演会」

開催日時：2019年5月1日(水) 16:00-18:30

開催場所：明治学院大学白金校舎 本館2階 1201教室

講師：小森 陽一 (教養教育センター 客員教授)

コメント：吉岡 拓 (教養教育センター 准教授)

共催：国際平和研究所、明治学院大学白金高校有志

2019年度第3期 「アジア神学セミナー」

【開講日】 毎週金曜日 18:25~20:25

【開講場所】 明治学院大学白金校舎 81 会議室等

5/10 オリエンテーション (徐正敏所長)

5/17 アジアの文脈から聖書を詠む (永野茂洋所員)

5/24 ヘボンの和訳聖書 (岡部一興協力研究員)

5/31 「日本的神学」の歴史 (原誠 同志社大学名誉教授)

6/7 日本の「国学」と近代思想 (嶋田彩司所員)

6/14 概論 日本の近代文学とキリスト教
(篠崎美生子主任)

6/28 中国の「近代化」にキリスト教はどうかかわったか
(渡辺祐子所員)

新着図書

- ・『福音と世界』No. 4、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 5、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 6、新教出版、2019。
- ・『福音と世界』No. 7、新教出版、2019。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 104、日本基督教団出版局、2019。
- ・『説教黙想 アレタイア』No. 105、日本基督教団出版局、2019。
- ・『賀川豊彦研究』第66号、本所賀川記念館、2019。
- ・『パトリスティカー教父研究-』第22号、教友社、2019。
- ・『キリスト教年鑑2019』キリスト教新聞社、2019。
- ・『〈フランツ・シューベルト〉の誕生 喪失と再生のオデュッセイ』堀朋平著、法政大学出版局、2016。
- ・『聖書 新改訳2017』新日本聖書刊行会 翻訳、いのちのことば社、2017。
- ・『聖書 聖書協会共同訳』日本聖書協会、2018。
- ・『新約聖書 訳と註 第七巻 ヨハネの黙示録』田川建三訳著、作品社、2017。
- ・『脅かされるいのち-胚の操作から武器の市場まで-』ホアン・マシア著、オリエンズ宗教研究所、2002。
- ・『出会いと対話からの宣教と福音化』エルネスト・D・ピレインス著、オリエンズ宗教研究所、2002。

・『暴力と宗教』ホアン・マシア著、オリエンズ宗教研究所、2005。

・『キリスト教をめぐる近代日本の諸相-響鳴と反撥』加藤信朗監修、オリエンズ宗教研究所、2008。

・『ミサを祝う』国井健宏著、オリエンズ宗教研究所、2009。

・『教会と学校での宗教教育再考』森一弘他編、オリエンズ宗教研究所、2009。

・『信教自由の事件史-日本のキリスト教をめぐる-』鈴木範久著、オリエンズ宗教研究所、2010。

・『キリスト教入信 洗礼・堅信・聖体の秘跡』国井健宏著、オリエンズ宗教研究所、2011。

・『キリスト教と日本の深層』加藤信朗監修、オリエンズ宗教研究所、2012。

・『こころを病む人と生きる教会』英隆一朗他編、オリエンズ宗教研究所、2012。

・『生きる意味-キリスト教への問いかけ』清水正之他編、オリエンズ宗教研究所、2017。

・『食べて味わう聖書の話』山口里子著、オリエンズ宗教研究所、2018。

・『Biblia Hebraica Stuttgartensia : A Reader's Edition』Donald R. Vance 他編、HENDRICKSON PUBLISHERS、2014。



2019年度メンバー

所長 徐 正敏

主任 篠崎 美生子

所員

教養教育センター：植木 献、嶋田 彩司、田中 祐介、永野 茂洋、渡辺 祐子

文学部：久山 道彦、齊藤 栄一、播本 秀史

経済学部：手塚 奈々子

社会学部：坂口 緑、佐藤 正晴、深谷 美枝

法学部：鍛冶 智也

国際学部：森 あおい

(以上 16 名)

名誉所員

鶴殿 博喜、遠藤 興一、大西 晴樹、小田島 太郎、加山 久夫、佐藤 寧、

司馬 純詩、柴田 有、千葉 茂美、辻 泰一郎、中山 弘正、新倉 俊一、橋本 茂、

真崎 隆治、丸山 直起、水落 健治、森井 眞、山崎 美貴子、吉田 泰

(以上 19 名)

客員研究員

坂井 悠佳

(以上 1 名)

協力研究員

Andrew H. Ion、李 相勳、李 省展、稲垣 久和、今村 正夫、岡田 仁、岡田 勇督、岡部 一興、

岡村 淑美、勝俣 誠、加藤 拓未、金丸 裕一、神山 美奈子、木村 一、金 香花、清澤 達夫、

小林 孝吉、齋藤 元子、佐藤 飛文、朱 海燕、徐 亦猛、鈴木 進、高井 啓介、高井 ハー 由紀、

高橋 一、竹田 文彦、辻 直人、土肥 歩、豊川 慎、中井 純子、中西 恭子、西元 康雅、裴 貴得、

洪 伊杓、堀 朋平、牧 律、松谷 曄介、松山 健作、丸山 義王、宮坂 弥代生、村上 志保、村上 文昭、

横山 正美、吉馴 明子

(以上 44 名)

教学補佐

高橋 英里

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第79号

2019年7月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩